

# フランス第二帝政期における裸婦像の受容 —エドゥアール・マネ《オランピア》の 同時代評価をめぐって—

東京大学  
井口俊

本発表は、19世紀フランスの画家エドゥアール・マネ（1832-1883）が描いた裸婦像、《オランピア》（1865年、パリ、オルセー美術館）の同時代評価を問い直すものである。

《オランピア》は、1865年にパリで開催された公式の展覧会（サロン）に出品されると、その絵画表現の過激さから、「スキャンダル」を引き起こしたことで知られている。裸体の立体感の希薄さ、平面的な空間構成など、美術アカデミーの教育とは異なる描き方をしたことがその一因として挙げられるが、しばしば指摘されるのは、この裸婦が同時代の批評家たちの目には娼婦として映ったため、道徳的な見地から批判を集めたという点である。第二帝政期のサロンにおいて裸婦像は人気の主題であり、観客の期待に沿うべく、画家たちは官能性を強調した裸婦を量産したが、それらが神話の女神や歴史の登場人物の姿を借りている限り、道徳性が大きな問題となることはなかった。それに対して、マネが《オランピア》で描き出したのは、そうした暗黙の了解を無視した裸婦像であることが先行研究において論じられてきた。

確かに、お客からの花束を抱えた召使いや、裸でありながら身に着けられた装身具やサンダルは、19世紀のパリに生きる娼婦の生業を暗示させる要素である。しかしながら、1865年のサロンの際に発表された美術批評を改めて精査し再検討してみると、批評家たちの着眼点はそうした箇所よりもむしろ他の箇所にあったことが分かる。モデルの表情や視線、不自然に力んだような身振り、尻尾を逆立てた黒猫などに加え、やや黄味がかり痩せた裸身や召使いの着ている衣服の色にまで批判は及んでいるが、娼婦のように見えるということを問題視した批評は意外に数少ない。にもかかわらず、《オランピア》は娼婦の表象の代名詞のように見なされ、その見方を補強するような言説ばかりが繰り返し引用されてきた。

そうした状況を踏まえ、本発表においてはまず、《オランピア》発表時に書かれた美術批評およびサロン戯画を可能な限り全て調査した上で、批評家たちの賞賛、批判の声の細かな分類を行う。また、マネは1865年のサロンに《兵士たちに侮辱されるイエス》（1865年、シカゴ美術研究所）も出品しており、先行研究では看過されてきたこちらの作品について書かれた批評も、マネと《オランピア》の同時代評価を知るための研究対象とする。さらに、同サロンに出品されたアカデミックな裸婦像の評価についても検討することで、同時代の鑑賞者たちの美的趣味を理解することも可能となる。これらの考察を通じて、その同時代評価を問い直し、裸婦像の道徳性をめぐる従来の議論とは異なる角度から《オランピア》受容の様相を明らかにすることが本発表の目的である。